

お寺の社会性

— 生奥坊主のつぶやき —

拾四

竹中尚文

1. 御仏飯さん

お仏飯と言うものがある。家庭の仏壇やお寺の本堂で仏様にお供えするご飯である。茶碗にご飯を山盛りにするのではない。金属製や陶器製の広口シャンパングラスのような形の容器にご飯を盛って仏様にお供えをするのである。

ただのご飯なのであるが、仏様にお供えをすると言うので、「御」を付けて御仏飯になり、さらに敬称を付けて「御仏飯さん」と言うことも多い。この御仏飯さんを若い門徒さんは、御仏飯を三個セットでお供えすると思っていたそう。

また、こんな話もある。知人は寺で生まれた。子どもの頃、御仏飯を本堂までお供えに行くのが難行だったそう。親から御仏飯に息をかけてはいけない、と言われていたの

で、御仏飯を持つと続く限り息を止めて運んだそう。

また、我が家のご飯は、御仏飯の形が作りやすい硬さに炊きあがる。実は、私は硬めに炊いたご飯が好きなのだが、その要望は通らない。

お参りをされていて、そこのお宅はパン食が多くて、めったにご飯を炊かないそう。御仏飯の代わりにパンはダメだろうかと質問された。それもいいかもしれない。

門徒さんのお宅にお参りをしていると、たまにちらし寿司であったり、赤飯であったり、まぜご飯だったりする。私は、こんなスタイルも好きだ。

2. お米ネットワーク

私の暮らすお寺は、田園地帯にある。毎年、秋のお米の収穫時期が過

ぎるとお寺にお米が集まる。専光寺のお仏飯米である。近年は米作りを止めて給料生活だけをする人も増えた。今、農家の集約化がどんどん進行している。

10 年程前に専光寺の門徒世話人会で、これからはお仏飯米を集めるのは止めて、お金で集めてはどうかと提案があった。専光寺の場合、一軒あたり 3 kgのお米を集めているのだが、それに見合うお金で集めようという提案だった。

お米を集めてくれる地区の世話人さんにとっては、これは大変な作業である。10 軒も集めると 30 kgになる。それをお金で集めると、その労働はずいぶん軽減される。そのお金で、御仏飯として必要なお米を買えばいいというのである。さらに、お金はお米より保存しやすい。

住職としての私は、地区の世話人さんには苦勞をかけるけれど、できるだけお米で集めてほしいとお願いした。第一の理由は、農家である門徒さんの作ったお米で御仏飯をお供えしたいから。さらにもう一つ理由があった。

専光寺の御仏飯米にはその働きがある。御仏飯米の行方である。御仏飯米は、お米を必要としている所に送る。宅配便で送るお宅が 4 軒、私が直接持参するお宅が 2 軒ある。他に団体が 1 ヶ所。この 6 軒は、楽な生活ではない。お寺から、お米が届くとありがたいと思ってくれるお宅である。団体に送っているのは、ホームレス支援の団体である。

ホームレス支援団体と言うのは、大阪駅前でホームレスに食量や衣類などを配布して、周辺をホームレスの人達と掃除をしている団体である。そこに私たちはいなり寿司を持って行く。このいなり寿司のご飯は、本願寺の別院から御仏飯のお下がり頂くのである。仏様にお供えをした御仏飯を食べきれない分を冷凍にしておいてもらって、まとめてもらっている。それを専光寺の仏教婦人会という組織の会員さんの有志がいなり寿司にしてくれるのである。私はいなり寿司を大阪駅前まで運ぶ係である。そこには、いろんな宗教関係の人達がサポートに来ている。ひとつのインターフェイ

ス(inter faith 異宗教)の協力である。

いくらか前の話である。小学校 6 年生の女の子から電話があった。電話を受けたのは妻だった。

「おばちゃん、ウチにお米がほとんどないねン」

「ゴメン、ゴメン。直ぐ送るね」
この子はお米が残り少なくなってきたことを母親に言わずにお寺に電話をしてきたようだ。彼女は三つ年下の弟と母親の三人暮らしである。ご飯を炊いて、母親の帰りを待っているのだろう。ご飯を炊く役目を担う彼女は、お米の残り少なさに気が付いたのだろう。母親の経済的大変さも知っているのだろう。そこでお寺に電話をしてきた。私たちは、彼女がお寺を思い出してくれて、嬉しかった。

私の子どもの頃は、ご飯を炊く子供も少なくなかった。今の時代には少数派になったとは言え、頑張っている子供たちもいる。

別のお宅の母親が電話で、こんな話をしてくれた。私はお寺からお米が届くと、自分のつらい時だとしても嬉しくなると言う。私は、忘れ

られていない、私は思われていると言う気がするそうだ。

お米を送ったお礼を言われると、私が作ったお米ではない、仏様のお米なので、食べる前には「いただきます」を言ってねと言う。「(亡くなった)おとうさん、ありがとう」でもいいから言ってよねとお願いしてきた。こんな時、仏様と私たちの繋がりがあるように思える。

話を御仏飯米に戻そう。私は門徒さん達に御仏飯米の行く先の説明として、先の少女の話をする必要がある。

ある時、私はお米を収納していて、「あれっ？」と思った。私は、お米を保存するために、300 kg用のお米保存冷蔵庫を買った。御仏飯米を集めるのを止めようと提案があった頃、その冷蔵庫に 250 kg程のお米が入った。一年間に集まるお米がそのぐらいだ。それが、いつの間にか冷蔵庫に 300 kgのお米が入るようになった。翌年は、もっとたくさん集まる。昨秋は、400 kgを越えた。いつの間にか、それぞれのお宅で、少しずつ多くのお米を出してくれ

ていた。

こんな優しさは私の好みだ。みんなが少しずつ力を出し合って、大きな力になるのはとても嬉しい。

英語に **due(s)** という言葉がある。支払われるべきお金である。会費や学会費や組合費や町内会費などを総称する。自分が支払う事で、誰かが助かるお金のことだ。御仏飯米もこれに入るかもしれない。言語はその社会背景の中にある。日本語にデューにあたる言葉は存在するのだろうか。

3. おじいちゃん

高校時代の友人のおじいちゃんの話である。もう 40 年程前の話だ。最近になって、彼がおじいちゃんの話をしてくれた。

おじいちゃんはお寺の門徒総代をしていたそう。そのお寺の本堂を修理することになったので、費用を工面するために、おじいちゃんは村中を寄付依頼に回ったそう。おじいちゃんが来ると、玄関に鍵をかけるお家もあったそう。お金を集めに来るおじいちゃんは、村人から

好かれることはなかった。その上、おじいちゃんはそのお寺の住職を好きじゃなかった。

高校生の彼は、おじいちゃんはずいぶんお寺の寄付集めをしているのか分からなかったそう。おじいちゃんが嫌いな住職が喜ぶことをして、何になる。おじいちゃんの行動に腹立たしくも感じたそう。

近年になって、彼はおじいちゃんの話をしてくれた。今、彼はおじいちゃんの行動に理解と敬意を持っているのだろう。おじいちゃんは、住職のために寄付を集めて回ったのではない。おじいちゃんはお寺のために寄付を集めて回ったのだ。おじいちゃんは、住職のことが嫌いでも、お寺のことが好きだったのだろう。私は、おじいちゃんがとっても深い所でお寺を認識していたように思う。自己のアイデンティティを仏の教えの中に見出していたように思う。

世に坊さんにお金を支払うという表現がある。それなら、お寺に支払うという方がいい。私は、偉い坊さんではない。いかなる修行もでき

ない私を拝む人はいない。タイトル通りの生臭坊主である。私は御布施に値するか疑問である。

4. お寺と坊さん

多くの人々が坊さんにお金を支払うと言う表現を使う。私たち坊さんはそれを考えてみなければならない。一般の多くの人達にとって、坊さんにお金を支払うのもお寺に支払うのも同じことだし、お金を支払うのも御布施をするのも同意語となっている。

それは、坊さんが門信徒の方から頂く御布施をそのまま自分の収入としているからだと思う。坊さんは門信徒の方々から御布施を預かって寺に帰って、それをご本尊様から

頂くのだ。

坊さんとお寺、人々はやはりお寺に帰属すべきだろう。カリスマ住職などという言葉も踊るが、坊さんは仏ではない。坊さんという人間に帰依するということに危うさを感じる。オウム事件も含めて宗教者への帰依、依存が悲劇を生むこともある。それよりは、自分は〇〇寺のメンバーだというような意識の方がよさそう。でき得れば、先程のおじいちゃんのように仏の教えの中に自己を形成できればと思う。